

特集

藤田医科大学総合アレルギーセンター・ばんたね病院総合アレルギー科の活動と診療のトピックス

矢上 晶子*

はじめに

藤田医科大学総合アレルギーセンターは、2017年にばんたね病院(名古屋市中川区：堀口明彦病院長)に開設された。初代センター長に堀口高彦先生(藤田医科大学名誉教授、現 豊田地域医療センター病院長)が就任され、センター、そして拠点病院としての基礎を築いた。当センターの特色として、アレルギーを診療する診療科医師(呼吸器内科、小児科、耳鼻咽喉科、眼科、皮膚科、消化器内科、総合アレルギー科)と薬剤師、看護師、検査技師、管理栄養士、事務部、施設部が一丸となって多職種で連携してセンター事業を進めていることが挙げられる。診療科や職種の壁を越えたセンターだからこそ可能にした診療や教育(人材育成)、研究があると実感している。

I. 愛知県アレルギー疾患医療連絡協議会事務局として

2018年より、愛知県アレルギー疾患医療連絡協議会の事務局として、愛知県アレルギー疾患医療拠点病院連携会議(年3回)や愛知県アレルギー疾患医療連絡協議会(年2回)の開催、ア

レルギー講演会(一般の方向け：年2回)、アレルギー研修会(教育関係者向け：年1回、医療従事者向け：年1回)を開催し、愛知県のアレルギー診療の現状の共有や課題の抽出、そして講演会、研修会を通して愛知県民に向けたアレルギー疾患の正しい情報提供に努めてきた(図1)。

講演会や研修会は、新型コロナウイルス感染症の蔓延により、現地開催からYouTubeライブ配信(藤田医科大学豊明校地より)に変更したが、後日、演者の先生方の貴重な講演を動画として当センターのwebサイトにアップすることにより、より多くの方に視聴していただけるようになった(<https://www.fujita-hu.ac.jp/general-allergy-center/information-station/movies.html>)。毎回、愛知県の拠点病院の先生方には演者としてわかりやすく魅力的な講演をしていただき、感謝の念に堪えない。今後も愛知県下の拠点病院の先生方と連携し、愛知県民におけるアレルギー疾患の意識の向上に努めていきたい。

II. 藤田医科大学総合アレルギーセンターとしての取り組み

センターでは様々な活動が行われているが、原則「診療」「教育」「研究」の3つの柱に基づく。これらの事業を柔軟かつ発展的に進めるため、多職種運営委員会を毎月開催し、事業報告や意見交換を行っている。単科だけでは診療や治療が困難な症例においては、コロナ禍以前になるが、複数の診療科の医師が同じ診察室で診療と意見

—Key words—

アレルギー疾患医療拠点病院、両立支援診療、アレルギー情報ステーション

* Akiko Yagami：藤田医科大学総合アレルギーセンターセンター長、藤田医科大学 ばんたね病院 総合アレルギー科教授



図1 2023年度愛知県アレルギー講演会(一般の方向け)チラシ

交換を行い、確定診断や効果的な治療に結びつける取り組みを行っていた。現在もコロナおよびインフルエンザ感染症などを鑑み、合同診療を再開できていないが、時期をみて再稼働したいと考えている。

最近のトピックスとしては、好酸球性胃腸症など成人の消化管疾患患者が増えたことにより、消化器内科(片野義明教授, 小林隆准教授)が当センターに加入したこと, さらには, 令和5年度「免疫アレルギー疾患患者に係る治療と仕事の両立支援モデル事業」に採択され, 両立支援コーディネーターや臨床心理士と共に「両立支援チーム」を発足させ, ばんだね病院における就学と就労に係る両立支援診療の稼働と共に, 両立支援事業を啓発するための愛知県下の企業への勉強会を開始したことが挙げられる(<https://www.fujita-hu.ac.jp/news/j93sdv000000nvnv.html>) (図2)。アレルギー疾患により就学や就労に苦慮している小児~成人の患者さん, さらには保護者に寄り添う医療体制を作り, 一人でも多くの患者さんが社会で活躍できるよう支援していきたい。

また, 教育・人材育成では, 医師や看護師に対する当センター独自のトレーニングコースを設



図2 ホーユー(株)総合研究所での勉強会(2023年11月, 長久手)

けている^{1~3)}。受講者の希望を基に, 各科の診療や食物経口負荷試験や皮膚テスト, 呼吸機能検査, 消化管内視鏡検査の見学や薬剤師や臨床検査技師による講義を受けられるようにスケジュールし, 現在までに18名(小児科, 皮膚科, 耳鼻咽喉科, 地域医療科, 看護師など)が受講し(<https://www.fujita-hu.ac.jp/general-allergy-center/training/training-top.html>), 現在, アレルギー専門医・指導医(日本アレルギー学会)や専門性の高いメディカルパートナーを目指している。

また, アレルギー診療には欠かせない看護師の育成として, 本学看護部主催の院内認定看護師研修プログラムがある。看護師は部署移動等によりアレルギーに限定した専門的な知識を養うことが難しいが, 当院ではアレルギー疾患を学ぶ意欲を持つ看護師を募り, 当センター医師による講義を実施し, アレルギー疾患の専門的な知識を持つ看護師教育を行っている。今後, 受講生の中から, 小児アレルギーエドゥケーター(一般社団法人日本小児臨床アレルギー学会認定)や皮膚疾患ケア看護師(公益社団法人日本皮膚科学会認定), アレルギー疾患療養指導士(日本アレルギー疾患療養指導士認定機構)などの資格を有する専門的なメディカルパートナーが誕



図3 藤田医科大学 アレルギー勉強会



図4 総合アレルギーセンターweb サイトアレルギー情報ステーション

生することを期待している。

地域の医療従事者向けには、「藤田医科大学アレルギー勉強会」を3か月に1回開催し、アレルギー診療に必要な知識や情報提供を行っている(図3)。2023年10月には第77回を迎え、コロナ禍によりweb配信を開始したこともあり、毎回100名以上の医療従事者の聴講があり、テーマによっては200名を超えることもある。今後も、臨床現場で役に立つ、その時々の特ピックスを提供していきたい。

情報提供としては、webサイトでの情報発信にも注力している(https://www.fujita-hu.ac.jp/general-allergy-center/)。特に、アレルギー疾患の情報提供の場として「アレルギー情報ステーション」を設け、『アレルギーを動画で学ぶ部屋』では「食物経口負荷試験」は14万回視聴され、「相談窓口(一般の方, 医療従事者, 教育関係者)・Q & A」では、これまでの相談および回答内容を公開し、正しい情報提供に努めている(図4)。またX(旧ツイッター)も活用し、勉強会, 研修会情報や季節ごとに有益なアレルギー疾患に関する情報を発信している(https://twitter.com/

XeO1asvpYt0KseV/)

研究としては、それぞれの診療科ごとの業績をwebサイトに公開している(https://www.fujita-hu.ac.jp/general-allergy-center/Research_achievements.html)。さらに、愛知県の6つの拠点病院が中心となり、医療連携パスを用いて、アレルギー診療の連携を検査結果などの断片的な記録だけでなく、担当医の診療の意向や治療方針、指導内容、患者による記録や想いなども含め、積極的に情報共有することで、診療の質や患者満足度が向上するのかを評価する共同研究を実施し発表した(研究代表施設における承認番号: HM23-047, 第72回日本アレルギー学会(東京))。この研究で得られた知見を、愛知県におけるアレルギー診療の質の向上、均てん化の取り組みに活かしていきたい。

Ⅲ. 藤田医科大学ばんだね病院総合アレルギー科としての診療

本科は、皮膚アレルギーを専門領域とした診療科であり、アトピー性皮膚炎, さまざまな病型を含む蕁麻疹, 職業性や化粧品, 金属を含む



図5 重症アトピー性皮膚炎患者における経口 JAK 阻害薬 内服前(左)と内服6週後(右)
手背の痒み、炎症が改善している。

アレルギー性接触皮膚炎，花粉-食物アレルギー症候群や経皮感作食物アレルギー，食物依存性運動誘発アナフィラキシーなどの成人の食物アレルギー，ラテックスアレルギー，薬剤アレルギーなどを診療している。

アトピー性皮膚炎や食物アレルギーでは多科および多職種連携が，そして，職業性や化粧品によるアレルギー疾患では行政や企業との情報共有・連携が必要であり，複数の診療科のアレルギー専門医やメディカルパートナー，他領域の専門家と共同で取り組む疾患を幅広く取り扱っている。

ここ数年の診療のトピックスとすれば，やはり慢性特発性蕁麻疹や中等症以上のアトピー性皮膚炎に対する生物学的製剤や経口 JAK 阻害薬の登場が挙げられる。これらの薬剤により，長期的に苦慮してきた慢性蕁麻疹やアトピー性皮膚炎の長期寛解維持が期待できる時代が到来したと言える(図5)。しかしながら，それらの薬剤を患者ごとにどのように使い分け，安全に使用していくかが課題であり，治療が必要な患者にそれらの薬剤による治療終了後を視野に入れ，診療を進めていきたい。

さいごに

アレルギーを専門とする医師が多科，多職種

のメディカルパートナーと連携して診療を行い，検査や治療に関わる研究を進めることで，今まで以上に社会的なニーズに応えるアレルギー診療が実現でき，これらがアレルギー診療の進歩や診療の均てん化に繋がると考える。

拠点病院として取り組んだこれまでの5年間で，地域の先生方にもご支援をいただき，難治性のアレルギーに悩む患者さんを一人でも多く助けられる流れができたこと，加えてアレルギー専門医を目指す医師が増えてきていることを感じている。

さらに今年度からは，アレルギー疾患の治療と就学や就労との両立支援の取り組みも開始し，企業や学校関係者，両立支援に関わる医療コーディネーターとの連携や診療体制の構築，それに携わる人材の教育・育成に注力することも我々の仕事であると考えている。

今後も，アレルギー疾患医療拠点病院がアレルギー専門医や非専門医である家庭医を繋ぎ，患者はもとよりアレルギーではない一般の人々に向けた情報提供を積極的に行い，アレルギー診療を必要とする人が，疾患や症状に応じた医療機関を受診し，適切な治療を受けられる診療体制を作り，さらに，センターや各診療科での研究成果がアレルギー診療の進歩に寄与できるよう努めていきたいと気持ちを新たにしている。

利益相反

本論文に関して、筆者に開示すべき利益相反はない。

文献

- 1) Suzuki K, et al. A Nattokinase (Bac s 1), a subtilisin family serine protease, is a novel allergen contained in the traditional Japanese fermented food natto. *Allergol Int.* 2023 ; 72(2) : 279-285.
- 2) Mori Y, et al. Investigation of the sensitization rate for gibberellin-regulated protein in patients with Japanese cedar pollinosis : Sensitization rate for GRP in cedar pollinosis. *Allergol Immunopathol (Madr).* 2022 ; 50(2) : 89-92.
- 3) Kato K, et al. Impact of initial empirical antimicrobial choice and cause of in-hospital death in patients with nursing and healthcare-associated pneumonia (NHCAP) : A retrospective study. *Fujita Medical Journal.* 2022 ; 8(4) : 127-133.